蒲郡東港再考計画

2020 年 12 月 13 日

恒川研究室・安井研究室合同計画

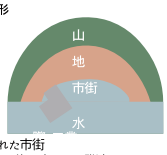
井野雄太・勝満智子・有信晴登・伊藤沙耶・稲垣拓真・稲葉魁士・井上玉貴・
高橋侑里・二輪風音・林佑樹・原和暉・松田茉央・山本拓・横井都乃・吉田亜紀

平安	公家で歌人でもあった藤原俊成が景勝地として開発 竹島に八百富神社を創建 **蒲郡発展の起こり まちとしての整備**
明治	形原松平家の元三河木綿や製塩など産業が盛んに 平坂街道を使った商業が発展
安土桃山	景勝地として広く知られる 常磐館に文豪や政治家がこぞって訪れる **観光都市としての基礎が固められ 中京圏の奥座敷として定着**
昭和初期	竹島橋架橋 蒲郡ホテル開業 周辺歓楽街発展 **観光都市蒲郡の最盛期**
昭和中期	旧海軍航空基地跡に工場の建設 伊勢湾台風の復興・防災のため埋め立てと防潮堤の整備が進められる 埋立地に工場が建設され国際貿易港として発展 **終戦後工業用地として開発が進む**
昭和後期	港湾港湾機能が豊橋方面に移り始め貿易港として衰退し始める ポートルネッサンス21計画によりさらに埋め立て **水上貿易の衰退**
平成	蒲郡インナーハーバー計画が立ち上がる アメリカンズカップ開催は断念 海辺に未利用地が広がる **施設老朽化、ニーズの変化等による観光客・宿泊者数の減少**

観光と開発のバランスが崩れ中途半端に空洞化

01. 蒲郡東港の現状課題

■蒲郡の概形



·山に囲まれた市街
　山地から海に向かって発達
　後背産地の肥沃な土壌を利用した産業と共に発達
·海に開かれた市街
　湾型で、かつて船溜まりなどが存在
　昔から海を利用して生活
·市街は住工混在型

基本情報

【土地性】
- 愛知県の南東部に位置し、名古屋駅から蒲郡駅までJR東海道本線新快速で約40分で着く。
- 渥美半島と知多半島に囲まれた温暖な気候の海辺の街で、竹島あたりの沿岸一帯が三河湾国定公園に指定されている。
- 山と海に挟まれている。

【人口】
総人口：76,633人　男性：37,936人　女性：38,697人
総世帯数：31,317人（令和2年度）

【観光】
竹島、竹島水族館

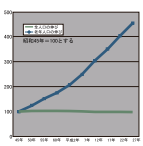
【特産物】
蒲郡みかん、深海魚

竹島

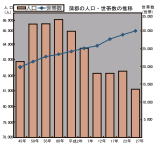
長さ387メートルの橋で陸地と結ばれて、国の天然記念物に指定されている蒲郡のシンボル「竹島」。島の中央部には、日本七弁財天のひとつである「八百富神社」がある。

竹島橋は、縁結びの橋と呼ばれており、長さが387メートルある。冬にはシベリアから渡り鳥が飛来し、心が和む。

■ 人口の現状・問題



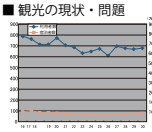
高齢化



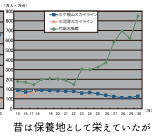
若者の流出に伴い、市民の高齢化が顕著になってきた

高齢者が楽しく過ごす
若者を呼び込む
蒲郡を好きになる

■ 観光の現状・問題



温泉地として衰え



昔は保養地として栄えていたが泊り客が減少し、旅館も減少

日帰り観光地として定着

竹島水族館に来てそのまま帰ってしまい、観光地はそれぞれのつながりが薄い。

蒲郡としての一体性
滞在時間の延長

■ 土地の現状・問題

·物流·旅客輸送が日常的に行われていないため、地域の人の利用が少ない
·機材や道具が乱雑に置かれてあり、景観が損なわれている ·海岸沿いに造船所があるため、海と陸を結ぶ土地が半減している

·敷地内の港に停泊している船はクルーザ、漁船、遊漁船
·漁港ではないため漁業関係者以外は地域の特産物に直接触れる機会は少ない

市民が海岸沿いを訪れ、海が生活の一部になる

■ 食の現状・問題

·特産物が点在しており、集まる場所がないため、特産品の認知度が低い

·深海魚が特産物としてあるが、海沿いに食店や市場がないため深海魚が特産物であることの認知度が低い
·「蒲郡まちじゅう食べる水族館」を提唱しているが計画地の湾岸周辺には提携しているお店がなく、深海魚とのつながりが薄く感じられる。

市民が蒲郡の特産物に触れ
観光地に発信できるようにする

■ スポーツの現状・問題

家族にとっての活動として気軽さであったり憩いの場があることが大切である。また、アフターコロナでは身近な範囲での居場所がさらに重要視される。

敷地の近場に競技ができる野球場やサッカー場、テニスコートは満足している。

蒲郡の市民にとって足りていないもの

市民が気軽にレクリエーション的にできるスポーツの場所でそれを通じてコミュニティが生まれる場所

■ アートの現状・問題

蒲郡市には美術館がなく、身近にアートに触れる機会が少ないことや、蒲郡湾岸の竹島と海のある風景の価値を生かす

■ 宿泊の現状・問題

宿泊地として衰退してしまった為、宿泊地が減少。
現在は駅前のビジネスホテルと竹島近くの数居の高いホテルしかなく、気軽に止まることができる場所がない。

市民も日常的に使うことができ、観光客が気軽に泊まることができる計画

■ イベントの現状・問題

現在イベントはたくさん行われているが、個々で完結してしまいつながりがないため、イベントが連携をとり、市全体を活気づける

02. 蒲郡東港再生のシナリオ

暮らしと観光の融合
蒲郡市の都市計画のテーマ

▼

学び育み憩う
蒲郡東港地区の活性化

▼

アカデミックゾーン
市民向けのエリアに

蒲郡市民

市民の高齢化が著しい　若者の流出　市民利用ができる施設が少ない

蒲郡市の高齢化率は上昇しており、高齢者が増加するだけでなく、若者の市外流出も見られる。現在の状況より、市民の生き生きとする活動の場や交流ができる環境が少ないと考えられる。

蒲郡市には、山や海に囲まれる豊かな自然が存在し、かつ都心にも行き来しやすい地である。

蒲郡に市民にとってさらに身近で、暮らしの中で利用できる施設、機会を整え、定住したくなるような若者を増やすまちづくりを目指す。

観光客

蒲郡市は観光交流立市と宣言され、観光都市として認識されている。 また、名古屋から電車で約 1 時間程度であるため、近場の観光地としても 知られる。

かつては温泉地や保養地として栄え、近年では竹島水族館の興隆により観光客は足を運ぶようになった。

観光地は点として存在しており、回遊するというより日帰り客がほとんどを占める。

かつては海に面した集落の形であり、街と港は近かったが、現在は埋立地によって市街地と海に距離ができている。それにより、海辺の市民利用が少なく、生活の一部としての関わりが薄れてしまった。
ゆえに、施設間を市民の為の活動空間として整備し、市民の賑わいをもたらし、さらに蒲郡の魅力を観光客に知ってもらう。

昨今までの受動的な学び・人間関係の在り方を再考し、年齢・形式に関わらない自由な生涯学習ができる環境を目指し、学ぶことを通じて、生きがいや市民との繋がりを得て生活を豊かにする。

→ 蒲郡が観光都市としてだけでなく、市民が生き生きと暮らす持続可能な社会となることを目指す

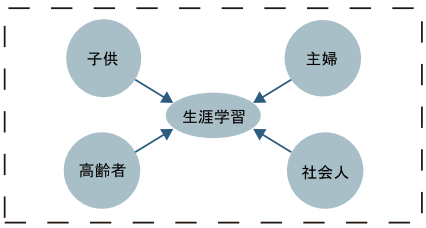
03. 生涯学習ゾーンとは

■生涯学習とは（一般的な概念）

「生涯学習」という言葉は，一般には，人々が生涯に行うあらゆる学習，すなわち，学校教育，社会教育，文化活動，スポーツ活動，レクリエーション活動，ボランティア活動，企業内教育，趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられます。また，生涯学習社会を目指そうという考え方･理念自体を表していることもあります。
また，「生涯学習社会」とは，「人々が，生涯のいつでも，自由に学習機会を選択して学ぶことができ，その成果が適切に評価される」（平成4年生涯学習審議会答申）ような社会であるとされています。

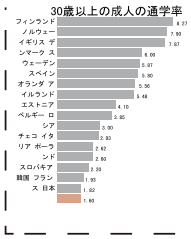
参考：平成１８年版　文部科学白書

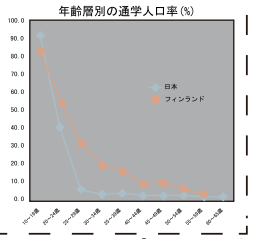
多世代のイメージ



学歴や年齢に関わらず
自由に学習機会を選択して学ぶことができる

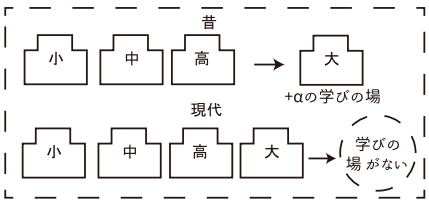
■日本における生涯学習の現状





OECD「PIAAC 2012」より

変化の速い現代にとって生涯学習は大変重要であるが、日本は成人の学びなおしの制度が確立されていないため、生涯学習率が先進国の中最も低い結果になっている。
また、年齢層別の通学人口率に関しても各国に比べ、かなり低いことが分かる。



現在の教育システムでは、学歴のために進学することも多くみられ本来大学が担っていた卒業・就職後のさらなる学びの場としての機能はだんだんと薄れてしまっている。

■生涯学習の課題

現状と課題

①公民館を中心とする社会教育施設で学習が行われている
②その内容は趣味・教養にかかわるものが中心で、地域や社会全体の課題解決等に寄与するプログラムの開発が今後の課題となっている
③社会教育関係施設同士の連携は一部施設において活発に行われているものの、民間営利・非民間営利・非営利社会教育施設との事業連携は限定的である
④地域社会の社会教育・生涯学習を推進する社会教育主事などの専門職が不足している ⑤また、専門職を短期にローテーションしてしまう人事政策から、専門職員の力量形成が不十分である

参考：地域密着型「生涯学習大学」の事例研究～「シブヤ大学」を事例として

イメージ挿し替え

公民館のような社会教育施設において趣味や教養などの 出来合いの知識を付与するにとどまっている

地域や社会全体の課題解決に寄与するプログラムが求められる

趣味や教養などの学びは高齢者や主婦に対して生きがいを与えるが 学習の成果が適切に評価される機会は少ないのではないか。

04. 提案：アカデミックゾーン

アカデミックゾーンとすることで、蒲郡東港地区が市民に開放された学びのエリアとなる

学びを通じて、個人の生きがいを生み出し、 地域とのつながりによって生　活を豊かにする
観光都市となるだけでなく、市民が生き生きと暮らす持続可能な社会を目指す。

計画敷地を「生涯学習社会」　として目指し、地域を盛り上げる

蒲郡市は観光交流都市として制定されている。
また、現在点として存在している周辺観光地を学びでつなぐことによって、蒲郡の特色とする。

蒲郡市の広域ゾーニングから文化・スポーツで賑わう拠点とする

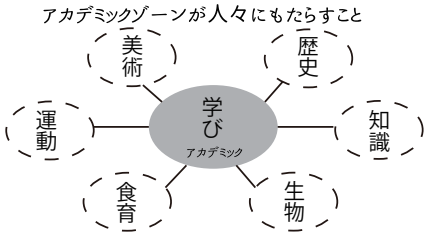
計画敷地の東側は東大塚の商業・レジャー施設、西側は温泉街と、観光地に挟まれた立地である。
これらと差別化を図り、蒲郡の多様な魅力を発信していく。

＋

近年は仕事であったり、家事であったり、打ち込んできたことが終了すると、生きがいをなくし新たに何かを得ようとする傾向が見られる。加えて、今後は能動的な活動が必要とされる
さらに、新型コロナウイルスの影響より、これらを加速させるだけでなく、近場で活動や生活をする人々が増えると見込まれる

学びを通じた「生きがい」「地域とのつながり」「生活の豊かさ」

アカデミックゾーンが人々にもたらすこと



能動的な活動を求める人々に与える

一人の時間が増えた　やることが見つからない
生きがいとなるような趣味がない

仕事で完結している新しく何かを始めたい
子供が大きくなった

生涯学習をアカデミックゾーンの核とする

■STEP1 空間整備

市民のための活動空間整備

市民が暮らしの中で利用できる空間、施設を計画する。また、施設と施設の間（海辺一帯）も活動空間として整備することで蒲郡の海辺一帯が市民のための空間となる。
点として分散してしまっている観光地や、人々が交流できず使われない箇所が所々あり、蒲郡としての一体性がない。そのため、蒲郡東港地区の一体整備と広場化により海辺を一帯で利用する人の流れを生む

■STEP2 事業整備

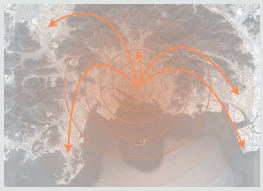
「学ぶ・育む・憩う」事業整備と定着

若者が定期的に訪れ、住みたくなるような魅力づくりをする。市民、関係人口の憩いの場･交流の場として整備し、観光地としての存在を高める。海辺一帯が整備され、市民の広場のような空間として定着を目指す。
点在していた観光地どうしがつながり、市民の暮らしをサポートする事業整備により、学ぶ･育む･憩う場として定着させる。

■STEP3 波及効果

市民の暮らしと風土性が感じられる観光

宿泊機能･夜間計画･アクティビティ機能を整備することで、一日を通して楽しめるような、元来の宿泊地としての魅力を取り戻す。また、観光地としての活気が戻ることで、市民の生活にもよい影響を及ぼし、市民の暮らしと風土性を感じる観光は、魅力の強化につながる。

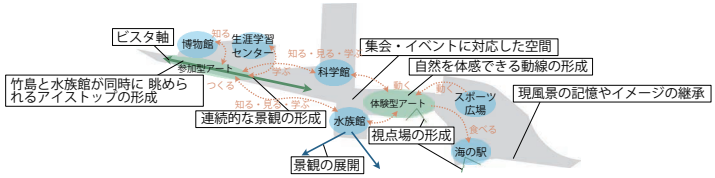


05. step1　空間整備　市民のための活動空間整備

●STEP1
空間整備
市民のための活動空間整備
●STEP2
●STEP3

■海辺を学びの場へ

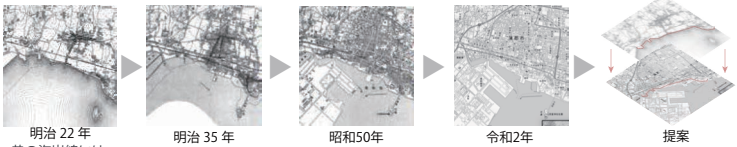
点として存在する各施設を線として結びランドスケープを整備する。そうすることで面として人を集めるエリアとなる。 その場所は体験を通して学びを育む場となるよう計画する。



01 かつての蒲郡の地形を学ぶ

■蒲郡の港湾の歴史

蒲郡港は景勝地として優れた海岸であった。(1)
蒲郡地区で陸海の結合を図るべく、明治 35 年に蒲郡駅舎南側が埋め立てられる。(2)
蒲郡港は港湾発祥地として初期段階から開発の対象となり、工業地を抱えながら存在してきた。(3)
しかし、コンテナの発達など港湾機能の変化によって次第に開発の勢いが落ちていった。 この空き地化した埋立地に昔の沿岸線を用いて気持ちの良い沿岸沿いの記憶を呼び起こす。



明治 22 年
昔の海岸線には潜在的な記憶が残っている(1)

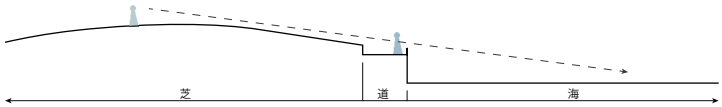
明治 35 年
埋立地が建設される(2)

昭和50年
工業化により開発対象となり。埋立地が拡張される(3)

令和2年
港湾機能の変化によって有効活用されていない

提案
昔の沿岸によって沿岸線沿いの記憶を呼び戻す

02 現在の特性を引き継いだ一体整備



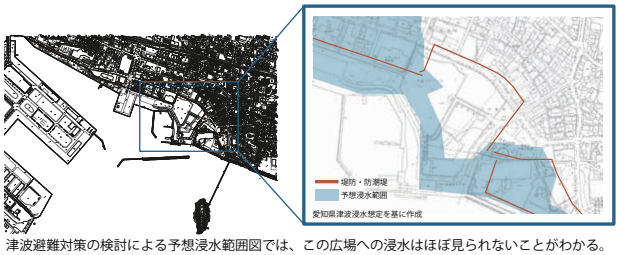
■竹島園地から見る蒲郡の海

現在の景勝地として優れた眺望として手前にある「芝」、奥に見える「海」、その海に浮かぶ「竹島」がそれぞれしっかりとした境界で分かれていて気持ちの良い風景を生み出している

■デッキの延伸

海岸沿いに沿って設置されたデッキは海を感じながら歩く気持ちの良い遊歩道となっていて、ベンチなどで休憩しながら海を見渡すことのできる場でもある

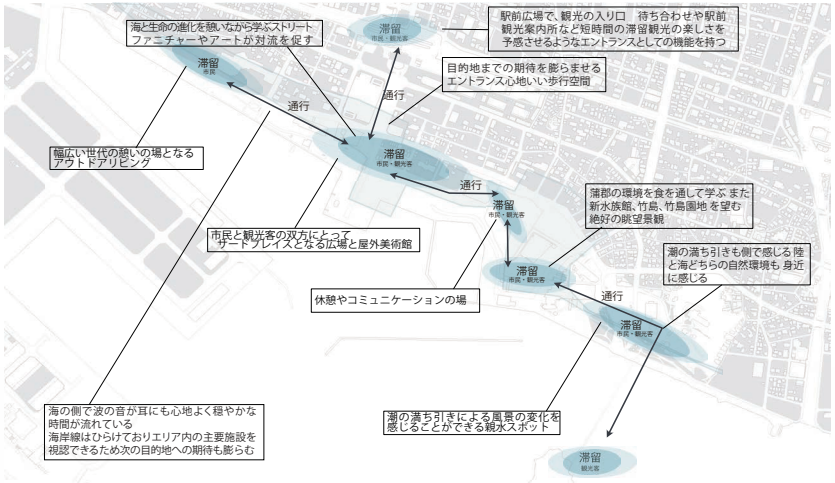
03 堤防の再整備



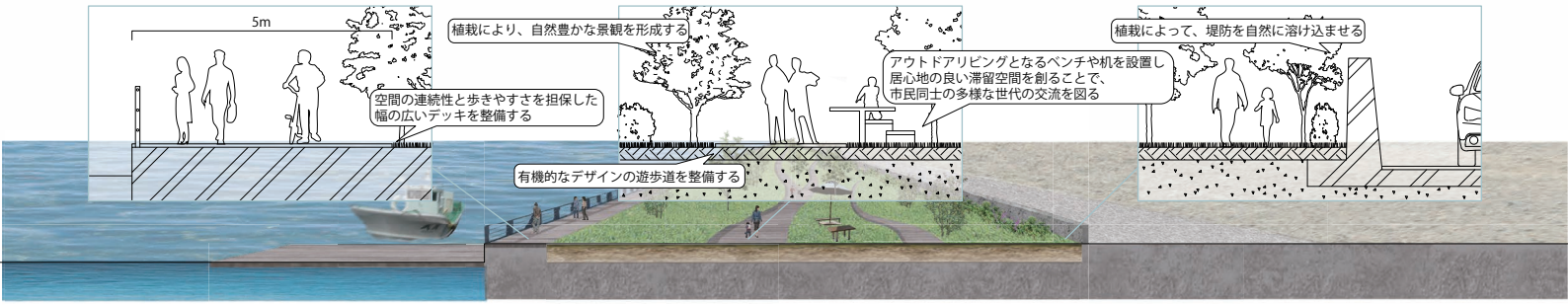
津波避難対策の検討による予想浸水範囲図では、この広場への浸水はほぼ見られないことがわかる。よって堤防を北側から南側に移設しても防災上問題ないと言える。

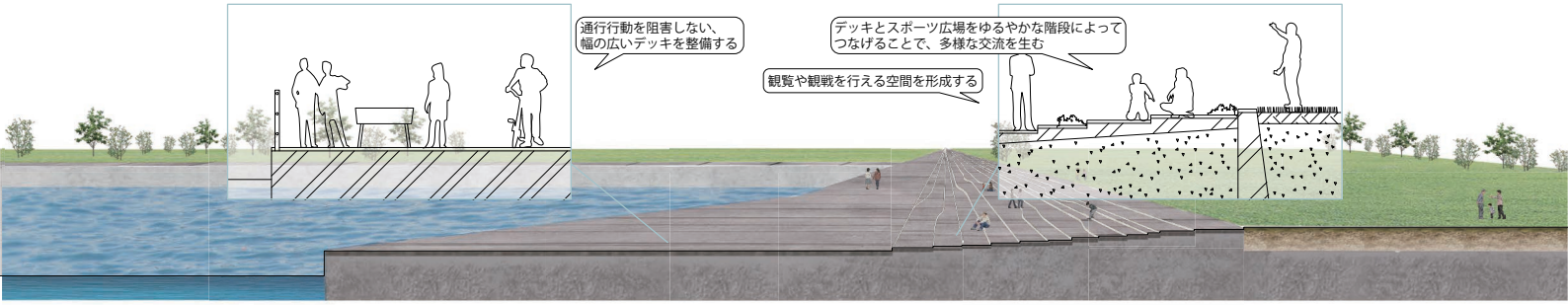
広場は市街化調整区域であるので、現状では5ha以上の大きさの非建築のスポーツ・レクリエーション施設の設置は認められていない。堤防を移設することで、広場全体が市街化区域となり、誰もが気軽に楽しむことができる陸上スポーツ広場へと変わる。

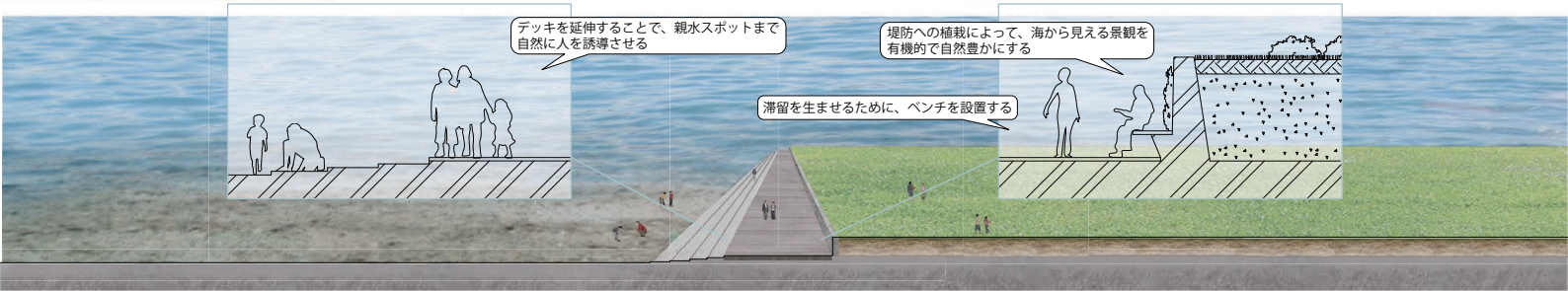
04 滞留行動で生まれる人の交流

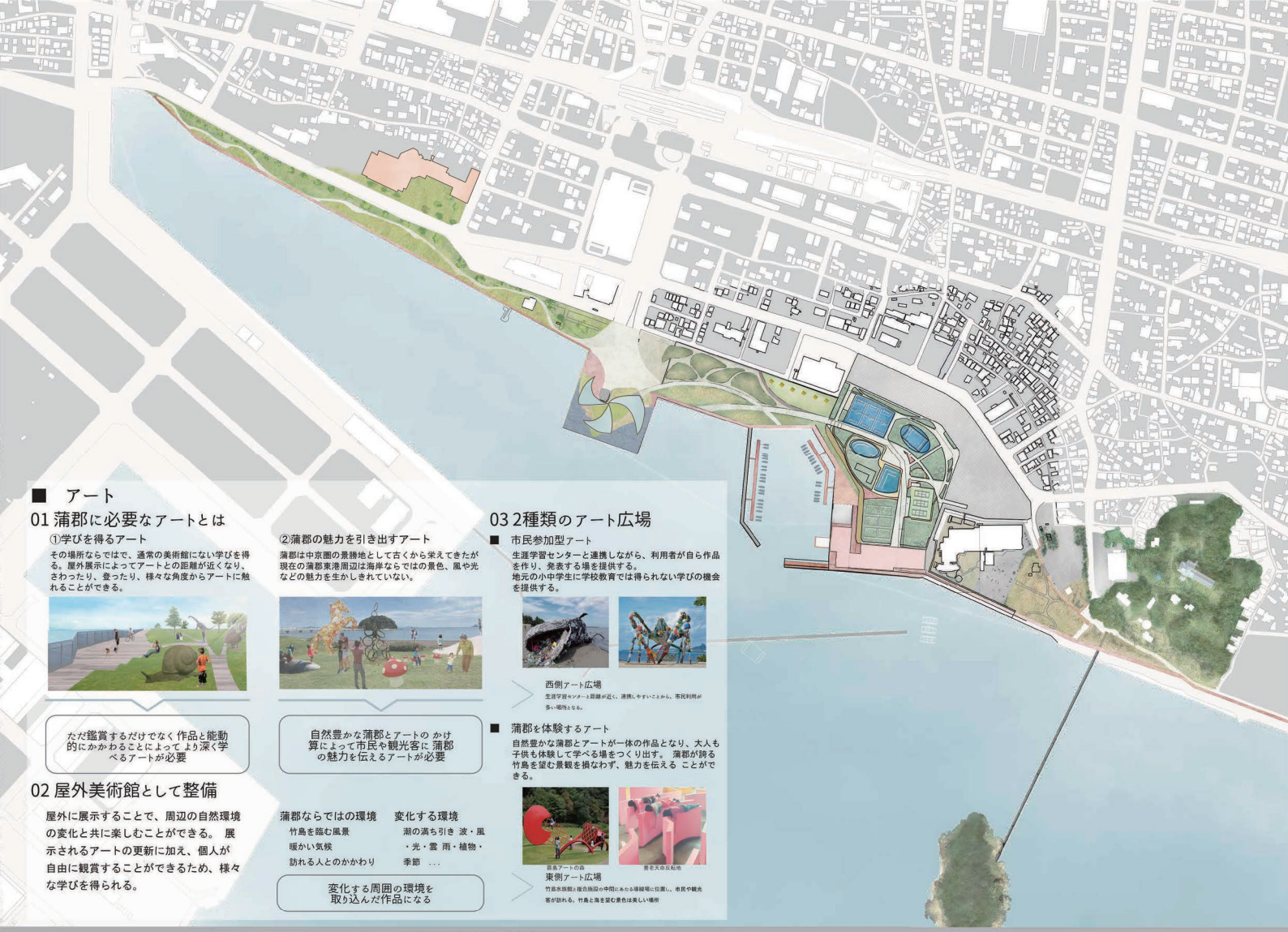


滞留する場と通行する場を整備する。滞留する場は、海へと視線が抜ける気持ちの良い空間や 動線を計画すた際に生まれた人の溜まりそうな場所を抽出し、計画した。









■ アート

01 蒲郡に必要なアートとは

①学びを得るアート

その場所ならではで、通常の美術館にない学びを得る。屋外展示によってアートとの距離が近くなり、さわったり、登ったり、様々な角度からアートに触れることができる。

ただ鑑賞するだけでなく 作品と能動的にかかわることによって より深く学べるアートが必要

②蒲郡の魅力を引き出すアート

蒲郡は中京圏の景勝地として古くから栄えてきたが現在の蒲郡東港周辺は海岸ならではの景色、風や光などの魅力を生かしきれていない。

自然豊かな蒲郡とアートの かけ算によって市民や観光客に 蒲郡の魅力を伝えるアートが必要

02 屋外美術館として整備

屋外に展示することで、周辺の自然環境の変化と共に楽しむことができる。 展示されるアートの更新に加え、個人が自由に観賞することができるため、様々な学びを得られる。

蒲郡ならではの環境
- 竹島を臨む風景
- 暖かい気候
- 訪れる人とのかかわり

変化する環境
- 潮の満ち引き 波・風・光・雲 雨・植物・季節 ...

変化する周囲の環境を取り込んだ作品になる

03 2種類のアート広場

■ 市民参加型アート

生涯学習センターと連携しながら、利用者が自ら作品を作り、発表する場を提供する。
地元の小中学生に学校教育では得られない学びの機会を提供する。

西側アート広場

生涯学習センターと距離が近く、連携しやすいことから、市民利用が多い場所となる。

■ 蒲郡を体験するアート

自然豊かな蒲郡とアートが一体の作品となり、大人も子供も体験して学べる場をつくり出す。 蒲郡が誇る竹島を望む景観を損なわず、魅力を伝える ことができる。

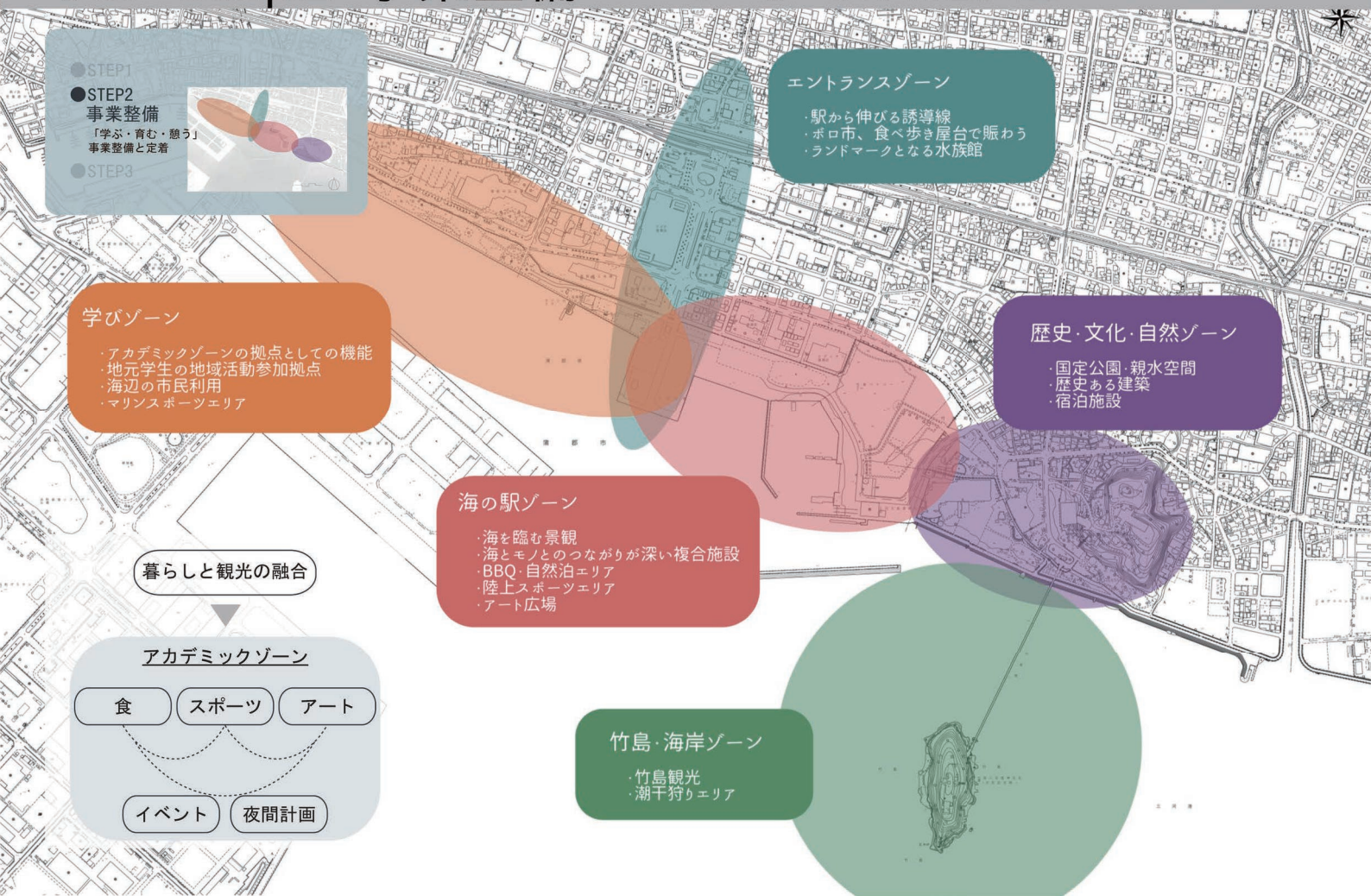
竹島アートの森　　景老天命反転地

東側アート広場

竹島水族館と複合施設の中間にある導線場に位置し、市民や観光客が訪れる。竹島と海を望む景色は美しい場所

06. step2 事業整備

「学ぶ・育む・憩う」事業整備と定着



整備計画のテーマ　　暮らしと観光の融合

ウォーターフロントの位置付け

「学ぶ・育む・憩う」
蒲郡のアカデミックゾーン

生涯学習センター

敷地全体を通じて考えたいこと

食

「食育」を推進

子供からお年寄りまで大切な「食」をテーマに学びの場を展開することで、市民全体の関心を引き寄せ、蒲郡東港地区と結びつける。

「地産地消」を推進

食育に加え、地産地消の考え方を地域に広める。地元食材を通じて蒲郡ならではの魅力に市民自身が気づき発信することで、より風土性を感じる観光を発展させる。

海の駅

スポーツ

気軽にできる運動の場

市民が体を動かす身近な施設として整備する。スポーツを通じて、市民の心と身体の健康を保つことと共に、コミュニティを広げる。

コミュニティスポーツの広がり

スポーツから生まれたコミュニティがより広まる。周辺に整備された飲食・休憩施設を合わせて利用しながら、幅広い世代での交流が起こる。

マリンスポーツ
陸上スポーツ

アート

参加･体験から学ぶ

参加・体験による学びに力を入れるためにアートを取り入れる。市民が作成に参加したり身近にアートを体験できる場をつくる。

蒲郡ならではのアート作品に

これまで活かし切れていなかった自然豊かな蒲郡の風景が、より魅力的なものになる。市民が誇り観光客が楽しめる景色を通じ、沿岸部がさらに盛り上がる。

アート広場

相互にかかわりをもたせる

イベント

何度も行きたい場所にする

知識・体験などを日常的に更新できる機会を設け、市民が何度も足を運び、楽しみながら学べる場をつくる。

市民･観光客両方を取り込む

蒲郡らしさを生かした「自然」に触れて学ぶ体験型イベントは、市民及び観光客を取り込む。また、食・スポーツ・アートをつなぐイベントを開催し、周辺との連携を強化する。

水族館

夜間計画

夜の魅力を整備

若者や現役世代が活動しやすい夜にも施設を開放することで、多世代が参加する市民活動の形を作る。夜の海辺を楽しめる照明計画を行う。

泊まって楽しい蒲郡へ

ライティング計画と合わせて、自然泊エリアを整備する。日帰り観光のイメージから、「泊まって楽しい近場観光のまち」を定着させる。

照明 夜間計画

他市とも連携

- 社団法人
- 大学
- 研究機関

市内全体での連携

- 公共施設
  - 蒲郡市図書館
  - 三谷水産高校
  - 水産試験場
- 駅北商店街
  - 福寿稲荷ごりやく市
- 行事・イベント
  - 三谷祭り
  - マラソン大会
- 民間施設
  - 蒲郡オレンジパーク
  - えびせん工房
  - 蒲郡市場
  - 三谷市場

他市とも連携

- 他市美術館
- 志摩市
- 御前崎市

海辺一帯に市民活動の場が創出

学びゾーン

- 蒲郡市博物館
- 生命の海科学館
- 生涯学習センター
- 学び・研究の連携
  研究成果の展示
- 児童による創作アート展示
- アート広場
- マリンセンター
- 器具の貸し出し シャワー・ロッカー利用
- マリンスポーツエリア

エントラスゾーン

- 蒲郡駅
- 屋台
- ランドマークで海辺へ誘導
- ランドマークで海辺へ誘導
- 海洋研究の連携 付属機能室の相互利用
- 水族館
- 大会の誘致

海の駅ゾーン

- 器具の貸し出し シャワー・ロッカー利用
- 陸上スポーツエリア
- クラブハウス
- イベント・展示内容の連携
- 温泉に入浴・食事
- 自然泊エリア
- 器具の貸し出し
  水廻り・食事利用
- BBQエリア
- BBQプランの連携
- 採った食材の調理
- 大会の誘致
- 地産地消で地場産業の振興
- 食育の連携
- イベントスペースとして利用
- 器具の貸し出し
  水廻り利用
- アートのコンペを開催
- アート広場
- 海の駅
- 水族館で展示している魚の販売
- 食育の連携
- 器具の貸し出し
  水廻り利用

歴史・文化・自然ゾーン

- クラシック ホテル エリア
- 国定公園
  - 海辺の文学記念館
- 竹島園地
- 潮干狩りエリア
- 竹島

海洋

- 海洋研究・実際に触れて学ぶイベントの連携
- 夏季フェリー
- 大島
- オフシーズンにインストラクターが生涯学習の講師として海辺一帯で活動

07. step3 波及効果

市民の暮らしと風土性が感じられる観光

●STEP1
●STEP2
●STEP3
波及効果
市民の暮らしと風土性が感じられる観光

01 各施設の波及効果

■生涯学習センター

豊かな自然環境や観光資源を活かし 会議や学会、展示会などを地域ぐるみで誘致する

▼

新しい試みにより、幅広い来訪者が訪れる
宿泊を含めた地域一帯の活性化が見込める

■水族館

ランドスケープとモニュメントを絡めて設計することにより
誘導性のある空間になる

▼

駅からの主動線を効果的に示し
周辺の施設へ観光客を誘導する

■海の駅

物流拠点として、蒲郡全体から農水産物や特産品を集め
市民・観光客に発信する 地元食品の流通を活発にし、
地産地消を推進する

▼

地元食品を得る機会が増え 地元で働く生産者に利益を還元

02 交通計画

■回遊性を持たせる

気軽に使える交通機関を整備し、敷地内さらに市全体での回遊性を高める。

観光客　観光地を巡りやすい
市民　　観光と絡めて交通機関を拡大することで、市民の生活範囲も広がる

▲横須賀で実際に運用されているシェアサイクル

▲ みかんの丘くるりんバス

■シェアサイクル

どこでも借りて、返せる気軽な交通手段として街全体に広がり、観光客・市民両方に使われる。

■バス

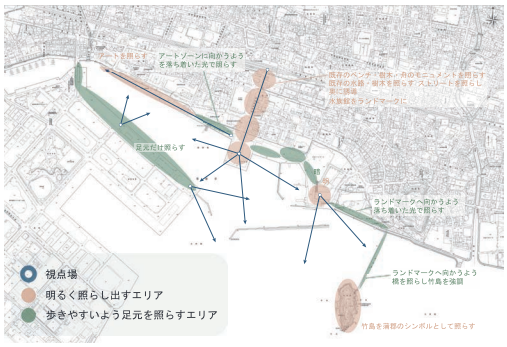
現在運行しているコミュニティバス「みかんの丘くるりんバス」のルートを、観光地と絡めて拡大する。

03 夜間計画

■照明計画

照明計画によって夜の時間を充実させ、宿泊客や市民の夜間利用を増やす。

ランドマーク　・視点場からの景色の見え方
　　・メリハリのついた照明計画
歩行空間　　・夜間の道しるべとなるように足元を中心に
　　・ランドマークのライティングとの調和



現在の竹島：昼

現在の竹島：夜

ライトアップの例　広島県宮島

04 食の広がり

■飲食店の展開

交通計画 ▶ 市民と観光客の活動範囲が広がる
夜間計画 ▶ 滞在時間が長くなり、夜でも楽しめる飲食店の需要が増える
→ 地域の商店街や食に関する市民活動、他地域の飲食店にも影響を与える

■蒲郡商店街

▲ 空き店舗も目立つ蒲郡商店街

▲福寿稲荷ごりやく市の様子

蒲郡駅に北側にある蒲郡商店街は、2か月に 1 度開かれる福寿稲荷ごりやく市に多くの人が訪れにぎわうが、普段は空き店舗も目立つ商店街となっている。

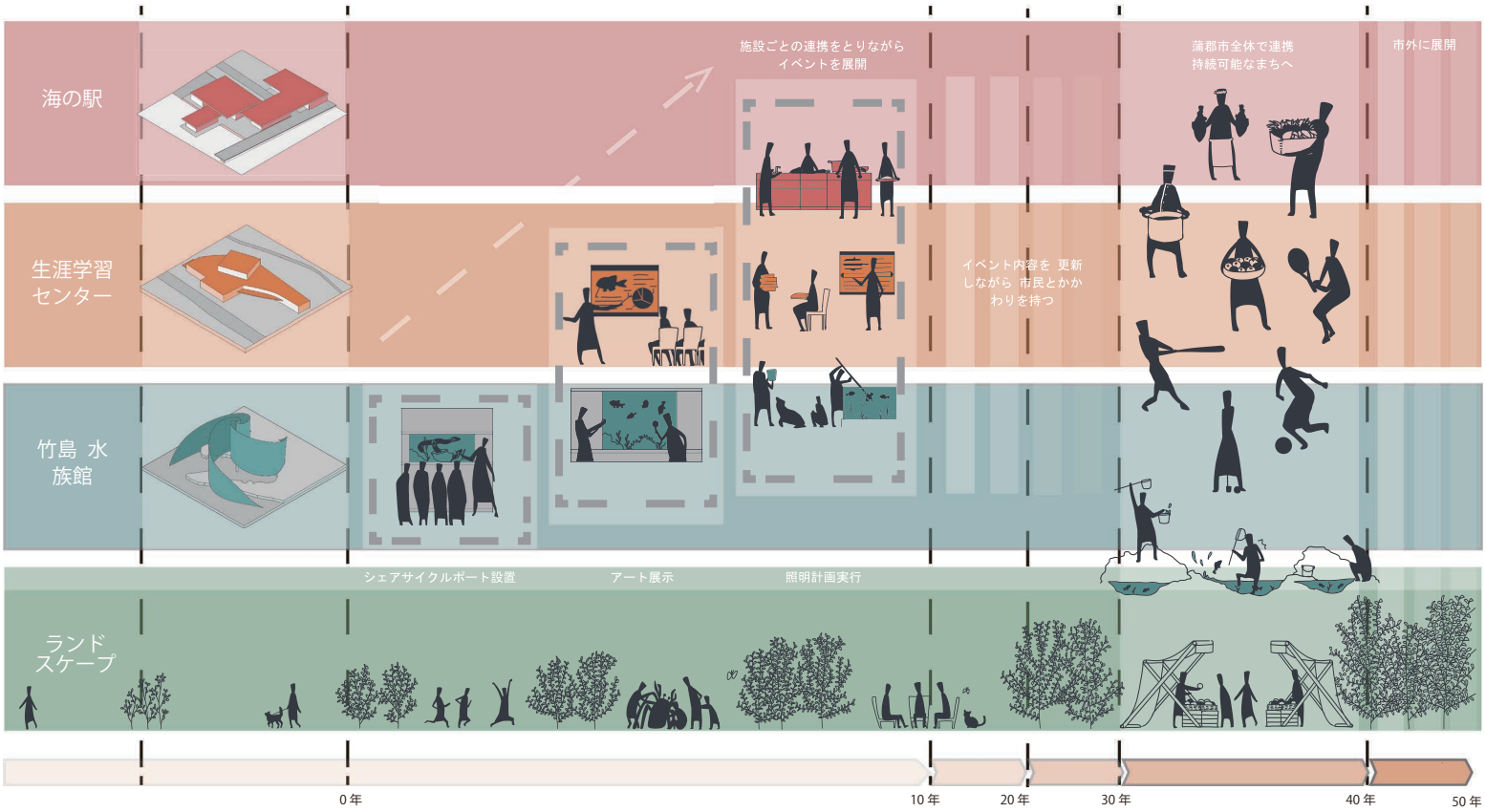
商店街：空き店舗提供創業支援
観光客：昼夜の食事需要が大きく
×
出店者：観光地蒲郡は魅力的
▶ 蒲郡商店街に飲食店やショップが新規参入
▶ 商店街：空き店舗減少
市民：身近な商店街が充実し生活が豊かに

商店街と沿岸地区を交通･夜間･食でつなげることによって回遊性が生まれ、市民･観光客の動きが活発になる。

■市民活動との連携

蒲郡市内の飲食店や旅館の代表などの有志メンバーが取り組む 「蒲郡まちじゅう食べる水族館」プロジェクトは、店で提供する魚について手描きの紹介カードを提示する活動で地元食材の発信･食育につながる。 このような食に関する市民活動も、今回の計 画と連携し、より広がりが期待できる。

■計画の展開



生涯学習センター

計画の大きな軸となるアカデミックエリアの、学びの拠点として「生涯学習センター」を提案する

01 学びの拠点

■拠点としての生涯学習センター

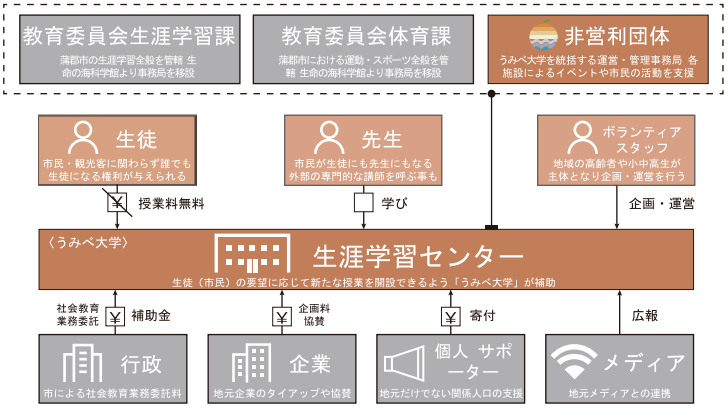
蒲郡をアカデミックゾーンとして整備する上で市民の学びの拠点として生涯学習センターを提案する。 生涯学習センターは市民大学のように学びたい人のために市民の能動的な学習を促進・サポートする施設として機能し、適切な学びの場を提供する。 出来合いの知識を付与するだけの従来の生涯学習ではなく、地域や社会の課題解決に寄与するような高水準の生涯学習を行うことができる。「生命の海科学館」「蒲郡市博物館」が近隣にある現市民会館の土地を計画敷地として選定する。

■生涯学習大学「うみべ大学」

うみべ大学

持続可能なまちづくりを行うにあたって、市民の主体性を育てるとともに市民の手でまちをより良い方向へ導くような学びが必要であると考える。 近年、地域に埋もれる資源を学習のための資源として活用し、市民の主体性を育む地域密着型の「生涯学習大学」が注目されている。
そこで、対象敷地における観光資源を市民が利用する学びの資源として捉えなおし、生涯学習大学「うみべ大学」の設立を提案する。

■生涯学習センター事業スキーム



生命の海科学館内の生涯学習課や体育課などの教育委員会事務局を生涯学習センターへ移設し、全体を統括・運営する機関として非営利団体 「うみべ大学」を設置する。 市民や観光客を生徒や先生として迎え、大学としての学習活動を行う。また、 大学の企画・運営を市民のボランティアスタッフが行うことで、市民主体の大学として機能し、少額の収益で運営を行うことが可能である。 運営費は行政による社会教育委託料や地元企業のタイアップや協賛、 観光客などの関係人口による寄付によって賄われる。

【凡例】
- 入れ子
- お金
- 情報
- 連関

02 効果と将来像

■生涯学習大学

シブヤ大学

シブヤ大学

渋谷というまちのあらゆる場所で多様な授業を開催している。誰でも無料で学べる、まちの学びの場であり、特別な技術習得や専門研究ではなく、きっかけとなるような学びを提供する。

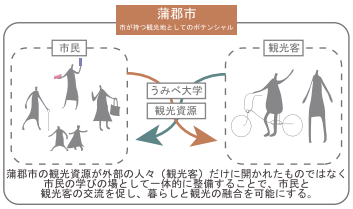
丸の内朝大学

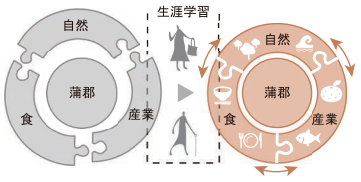
丸の内朝大学

ビジネスパーソンが朝の１時間を学びや体験のために利用する。大学内で生まれたコミュニティはクラス内に留まらず、その活動の輪を広げ、関連イベントの開催や地域連携、社会の課題解決などにコミットしている。

近年、 上記の事例のように街全体をキャンパスにして生涯学習事業を行う生涯学習大学が注目されている。 生涯学習大学は地域に埋もれている様々な資源を学習のための資源として活用し、学習プログラムを開発・提供する地域密着型の地域住民のための学びの場である。主な参加者が女性や高齢者にとどまり、 学生や有職者にとって学びの場として機能していない従来の地域行政による社会教育事業に対し、生涯学習大学では、学生や有職者の参加率が非常に高く、多世代にとっての学びの場として機能していることが分かる。また、学習活動の中で生まれたコミュニティが地域や社会の課題解決に寄与していることで、参加者の生きがいや達成感につながっている。

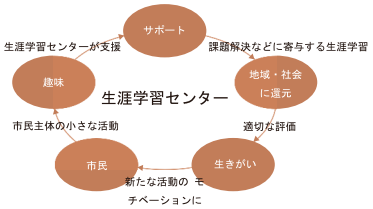
■効果

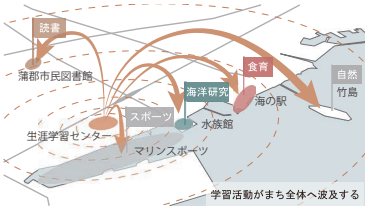




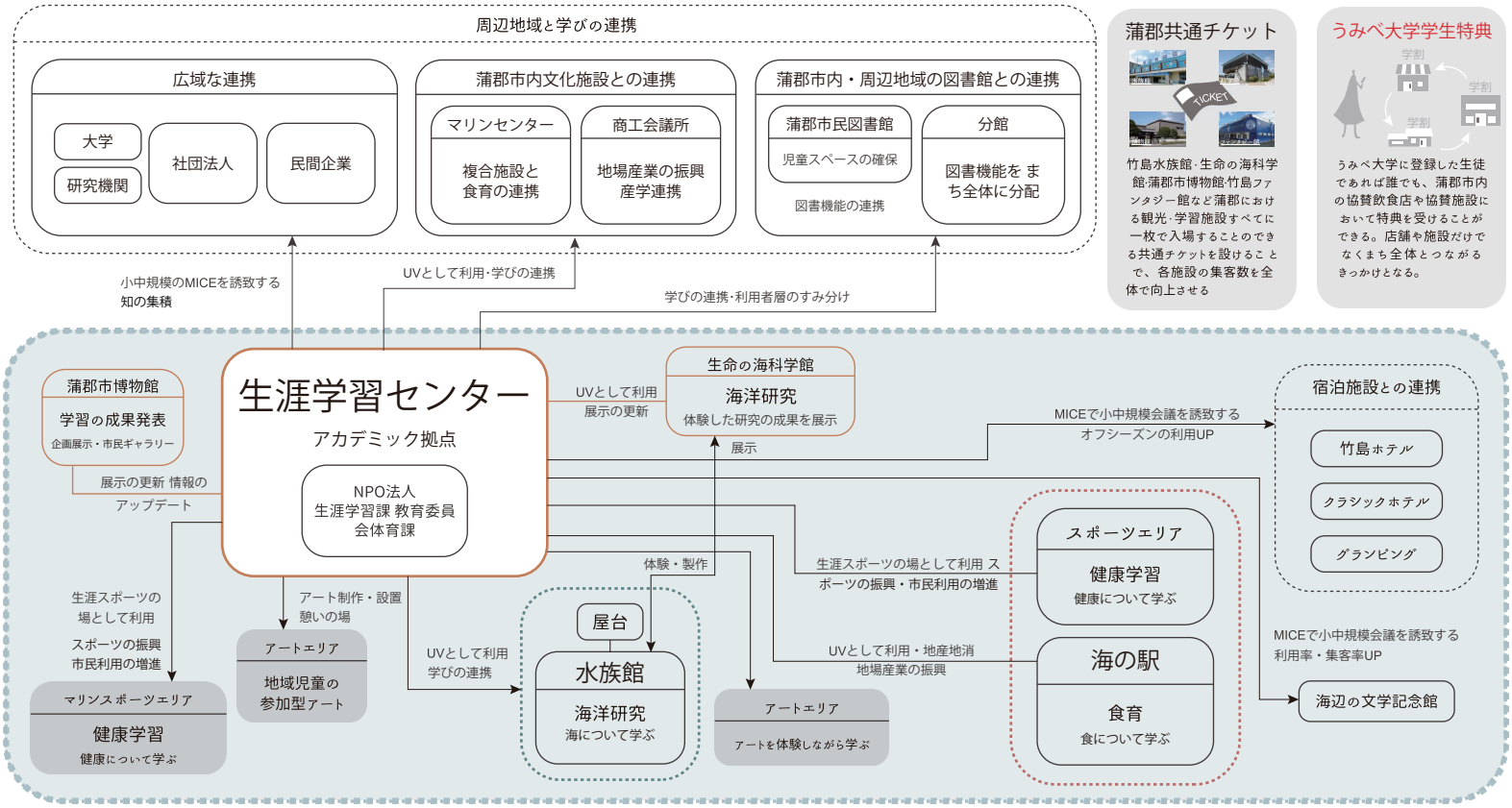
生涯学習大学を蒲郡に設置した場合に得られる効果として、市民同士の多世代交流に加え、市民と観光客の学びを通じた交流があげられる。 暮らしと観光の融合を図ることが可能であるとともに、 観光に学びという価値を付加することで街があらゆる人にとっての学びの場として機能する。また、生涯学習センターで行われる学習活動が地域や社会の課題解決に寄与することで、市民による持続可能なまちづくりが実現できる。

■将来像



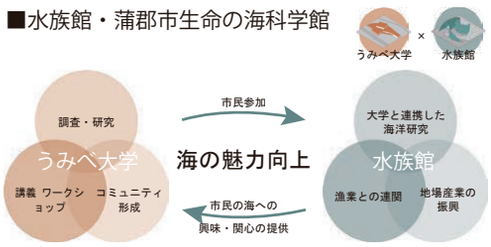


市民主体の活動を生涯学習センターがサポートし、学習の成果が適切に評価されることで、生きがいや新たな活動のモチベーションとなり、 再び活動が生まれるという学習活動の循環形成を目指す。 また、その活動が生涯学習センター内におさまることなく、地域全体に広がることで、市民の手による市民のためのまちが完成する。



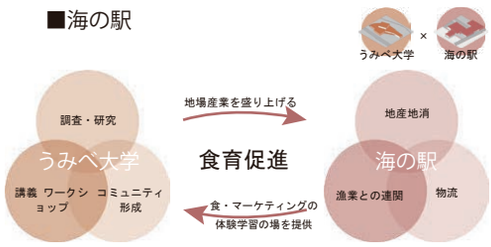
03 周辺施設との連携

■水族館・蒲郡市生命の海科学館



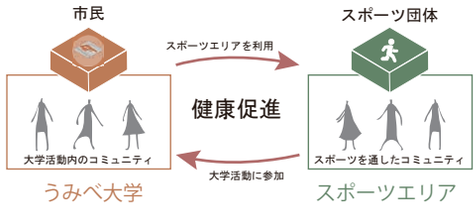
三谷水産高校や水産試験場、県内の海洋研究を専門とする大学や企業と連携し、市民参加の海洋研究を行う拠点として機能する。海洋研究の中でも海洋生物に焦点を絞り、漁業とも連関しあいながら産学連携を図り、地場産業の振興や蒲郡市における海の魅力向上を目指す。

■海の駅



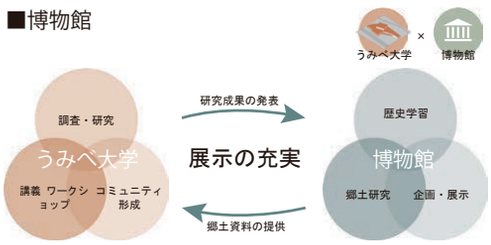
地域の食育推進の拠点として機能する。地産地消により農業や漁業などの地場産業を振興するとともに、市民の食や健康への関心向上を図る。また、生涯学習センターにて行われる食やマーケティングに関する座学的な学習とは異なる体験を通じた学習を展開し、地域の商店・台所のようにふるまう。

■スポーツ



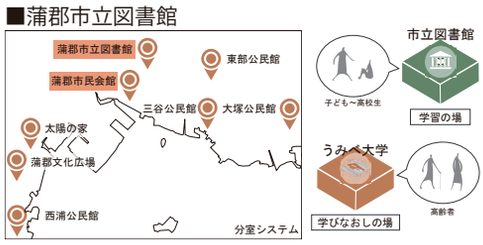
うみべ大学利用者同士がスポーツサークルを立ち上げ、スポーツエリアで活動を行うことで市民の健康促進を図る。また、スポーツエリアのみの利用者とうみべ大学の利用者が交流することでうみべ大学の存在を知ってもらい、さらなる利用者を見込む。

■博物館



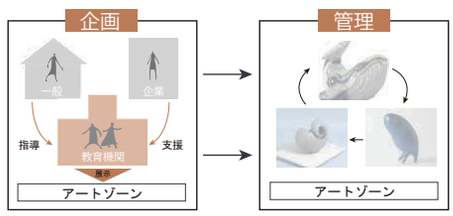
生涯学習センターにおける学びの成果発表の場として機能する。常設展示による蒲郡市の郷土歴史に関する知識付与に加え、市民の学習・研究の成果を特別展示室やギャラリーに展示することで、蒲郡市に対する知識を深めるとともに、施設内の情報のアップデートを図る。

■蒲郡市立図書館



生涯学習センターの図書機能と蒲郡市立図書館の利用者層の棲み分けを行う。蒲郡市立図書館の主な利用者を低年齢層とし、児童から受験生までの学習の場とする。また、生涯学習センターの図書機能の主な利用者を高年齢層とし、成人以上の学びなおしの場として整備する。

■アートとの連関



生涯学習センターでは児童のアート制作を支援し、そこで制作されたアートは施設の南側に位置するアートゾーンに展示される。展示作品は定期的に更新され、常に新しいアウトドアリビング空間を演出する。

■MICE

LARGE MICE	
LARGE 何百人単位	LONG 1年半前～予約必要
COMPLICATED 各所との連携	PLANE ハコモノ

COMPACT MICE	
COMPACT 1～49人程度	SHORT 即時～予約OK
SIMPLE 調整がラク	UNIQUE ユニークベニュー

企業の会議や研修旅行、国際会議、学会、見本市などを観光の観点から着目した総称。日本では、国際会議を中心に観光庁や日本政府観光局による促進が行われている 近年、巨大なMICE施設が全国に多く作られている。大規模施設を持たずに企業の会議場としての役割を担う小中規模のMICEがみられるようになり、それぞれの都市に合ったMICEの形を考える必要がある。

■ユニークベニュー

MICEは基本的に巨大なコンベンションセンターで行われる大規模会議がメインであるが、計画敷地に対しては規模が不適当であるため小中規模のコンパクトMICEを実施する。オフシーズンにコンパクトMICEの誘致を行い観光の閑散期に宿泊施設や飲食店の集客を見込む

■周辺施設との連携

生涯学習センターが学びの拠点としてふるまうことで、各施設と学びの連携を相互に行いながら、施設同士のつながりを強化する。生涯学習センターが中心となり、地域全体をアカデミックゾーンとして形成していく。

04 ゾーニング

■機能整理

仙台メディアテーク

- ギャラリー
- ホール
- オフィス
- ホワイエ
- スタジオ
- レファレンス

ぎふメディアコスモス

- カフェ
- インターネット
- ギャラリー
- スタジオ
- ショップ
- 図書機能

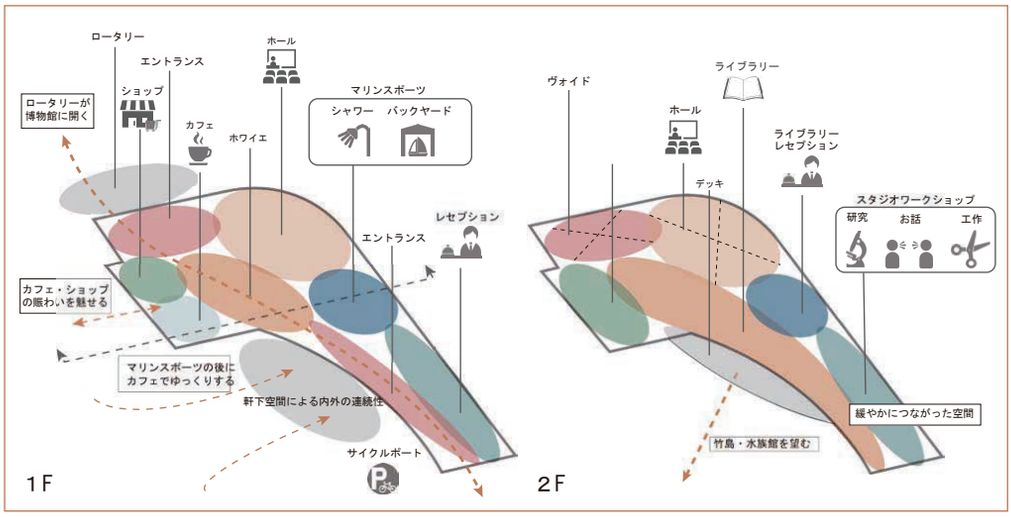
ヘルシンキ中央図書館

- 展望デッキ
- カフェ
- ギャラリー
- スタジオ
- インターネット
- 図書機能

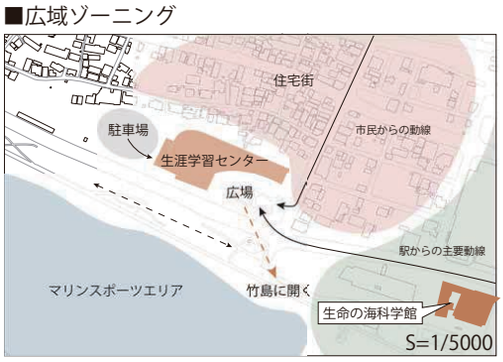
地域住民の学びの場として機能している事例から機能や利用方法の整理を行い、生涯学習センターに挿入する機能を決定する。施設全体を大学の学習空間であるラーニングコモンズのように計画することで施設内のあらゆる場所で市民の自発的な学習を誘発する。

〈抽出機能〉

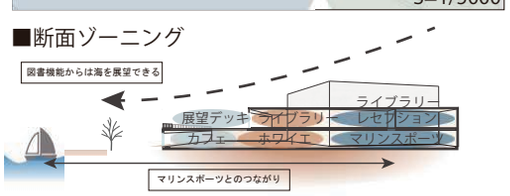
■ゾーニングA



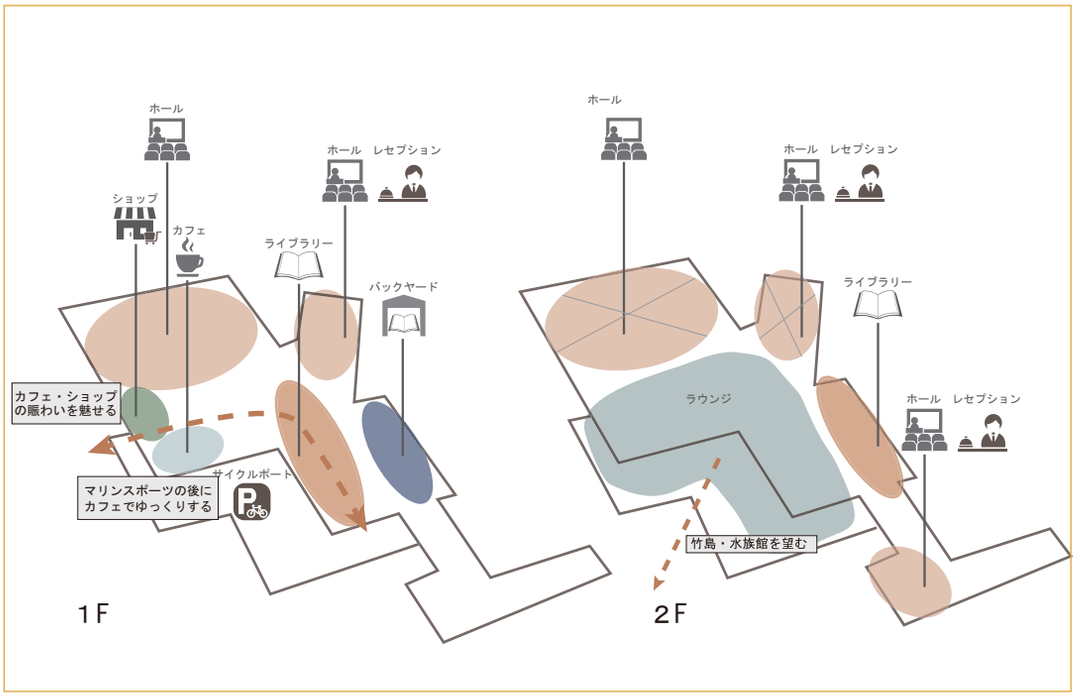
■広域ゾーニング



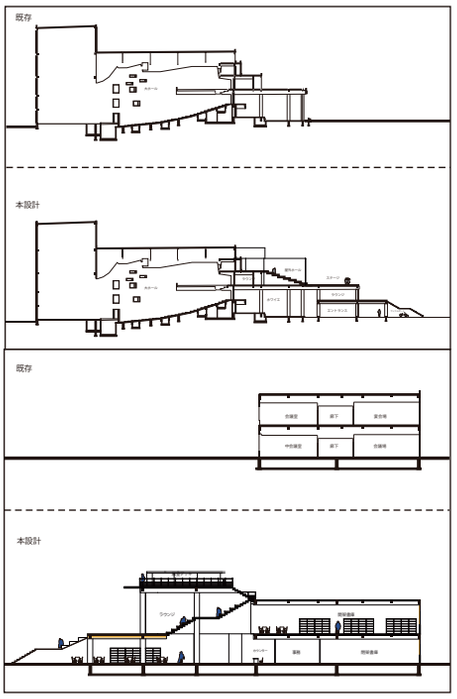
■断面ゾーニング



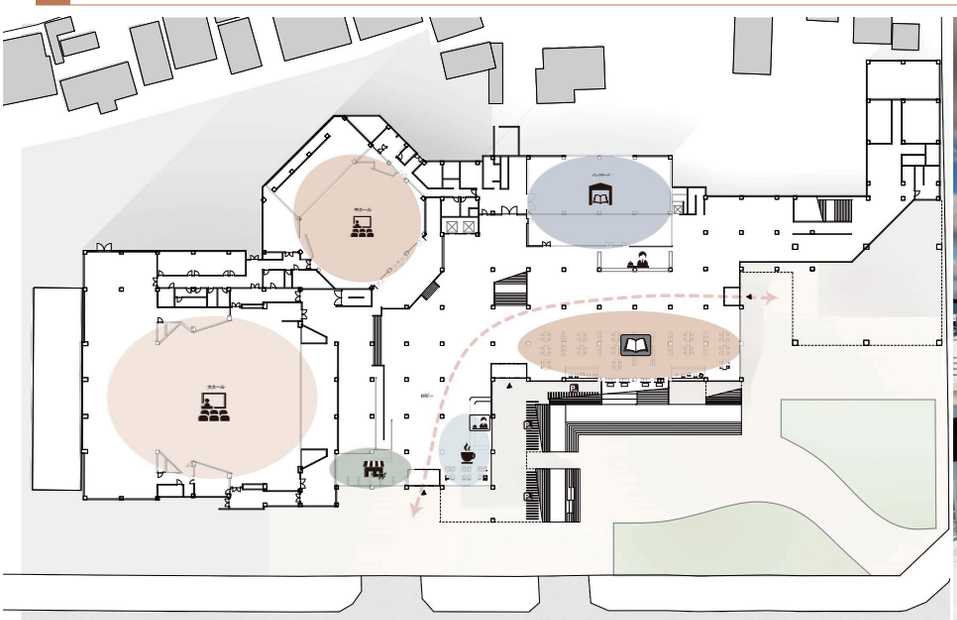
■ゾーニングB

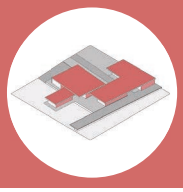


■ゾーニングB　断面



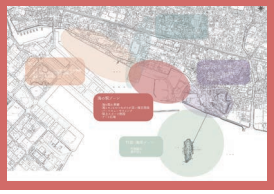
05　詳細設計





海の駅

モノが集まる海の駅エリアの、食の拠点として「海の複合施設」を提案する



01 食の拠点とは

■蒲郡の食の魅力その集積

魅力的な特産物が各地位に分散している。る。それに伴い、魅力の発信へとつながっておらず、世間に知られていない現状がある。それらの魅力を集約し発信拠点とする。

■蒲郡の人の魅力と参加

蒲郡出身の料理人

荻野伸也さん

荻野伸也
「OGINO」
オーナーシェフ
2007年 独立
年 シブヤ大学 参加
年 北海道で農家と
12 連携した惣菜店
をプロデュース
19年 店舗を開業
～
年

フランス料理のオーナーシェフである。規格外の野菜や自分で猟をした動物などを使った9割オーガニック料理を行っている。過去にはシブヤ大学に講師として参加している。

「食」の魅力発信

蒲郡出身のシェフに蒲郡の「食」の魅力や食材の大切さなどについて学ぶ。従来の料理教室より深く「食」について学ぶことができる。

周辺施設

竹島パルク内施設

中日売店
大あさり焼き、海産物販売、団子、ソフトクリーム他

お土産 みむら
蒲郡特産みやげ、アンティーク他

CHARI-CAFE POTTER
ヘルシー食、スイーツ、パン、コーヒー各種 自転車

地元での経験

建物の老朽化が激しいため、複合施設に移設する。地元のことをよく知る人に参加してもらうことで、蒲郡の魅力を発信する情報拠点として活動する

蒲郡市民

蒲郡市民について

福寿稲荷ごりやく市

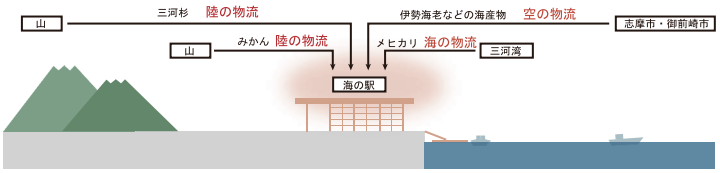
三谷祭り

蒲郡市農林水産まつり＆食育フェスタ

積極的な市民参加

イベント時には市民が積極的に参加し、施設内の運営を市民を中心に活気のある場としていく。また「まちじゅう食べる水族館」などの活動と連携をする。

■物流による「特産物」の集積



蒲郡には魅力的な特産物が各地に存在する。しかし、それらは各地位に分散しているとともに、魅力の発信へとつながっておらず、広く知られていない現状がある。それらを物流の循環を使って集積し、魅力発信を行う。

02 効果と将来像

■地産地消によるメリット　地域の利点

市民のメリット

・新鮮で安心な食材を買うことができる・生産者の顔が見え、安心
・おいしい食べ方を教えてもらうなど生産者との交流ができる
・本来の「旬」の味を知ることができる

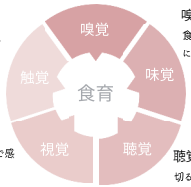
生産者のメリット

・新鮮で栄養価の損なわれない食材を提供できる・施設などに規格外のものを販売できるため無駄が減る・消費者のニーズを知ることができ、生産意欲が高まる・流通コストが安くなり、所得の向上につながる・農業に対する理解が深まる

■蒲郡市民の参加によるメリット

買う	地元の食材に特化したマーケット 蒲郡の海や山の特産品をここに集める	体験を通じて学ぶ食育
つくる	BBQ 場で自分が買った魚を食べる 地域の食材を使った食事処で、蒲郡の風土や文化を食べて知る	
食べる	調理について学べるパブリックキッチンでは 料理教室のようなもので食への理解を深めてもらう	

■食育による五感の育成とそれに伴うメリット



触覚
むく、切る、焼くなどで肌を使って感じる。

視覚
料理ができるところを見る。食べ物の色、形などを目で感じる。

嗅覚
食材、料理などのおいしそうなにおいを感じる。

味覚
料理の味を感じる。

聴覚
切る、焼くなど音を感じる。

五感の育成

「食」により五感を育て、「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践できる人間を育てる。
それにより、食に関する知識を身に付け、健康的な食生活を実践することにより、心と身体の健康を維持し、生き生きと暮らすために、食育を通じて、生涯にわたって「食べる力」＝「生きる力」を育む。

子供・若者

普段食べている「食」がどこからきているのか、どうやって作られているのかということを、自らの体験を通して学び興味を持ってもらう。

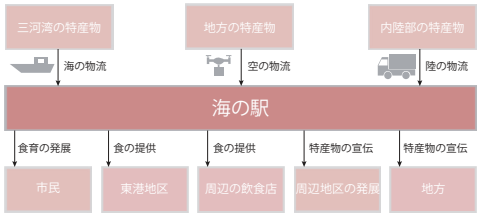
親世代

食に対する理解を深める。
地元の風土や特産品について知り、普段の食事に生かすことで、蒲郡の魅力を食で感じられる。

シニア世代

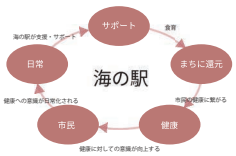
仕事に一区切りつき、生活に向き合う時間が生まれた人が、より豊かな食を楽しむために学ぶ。
自分の健康と向き合うことでもある。

■物流による波及効果



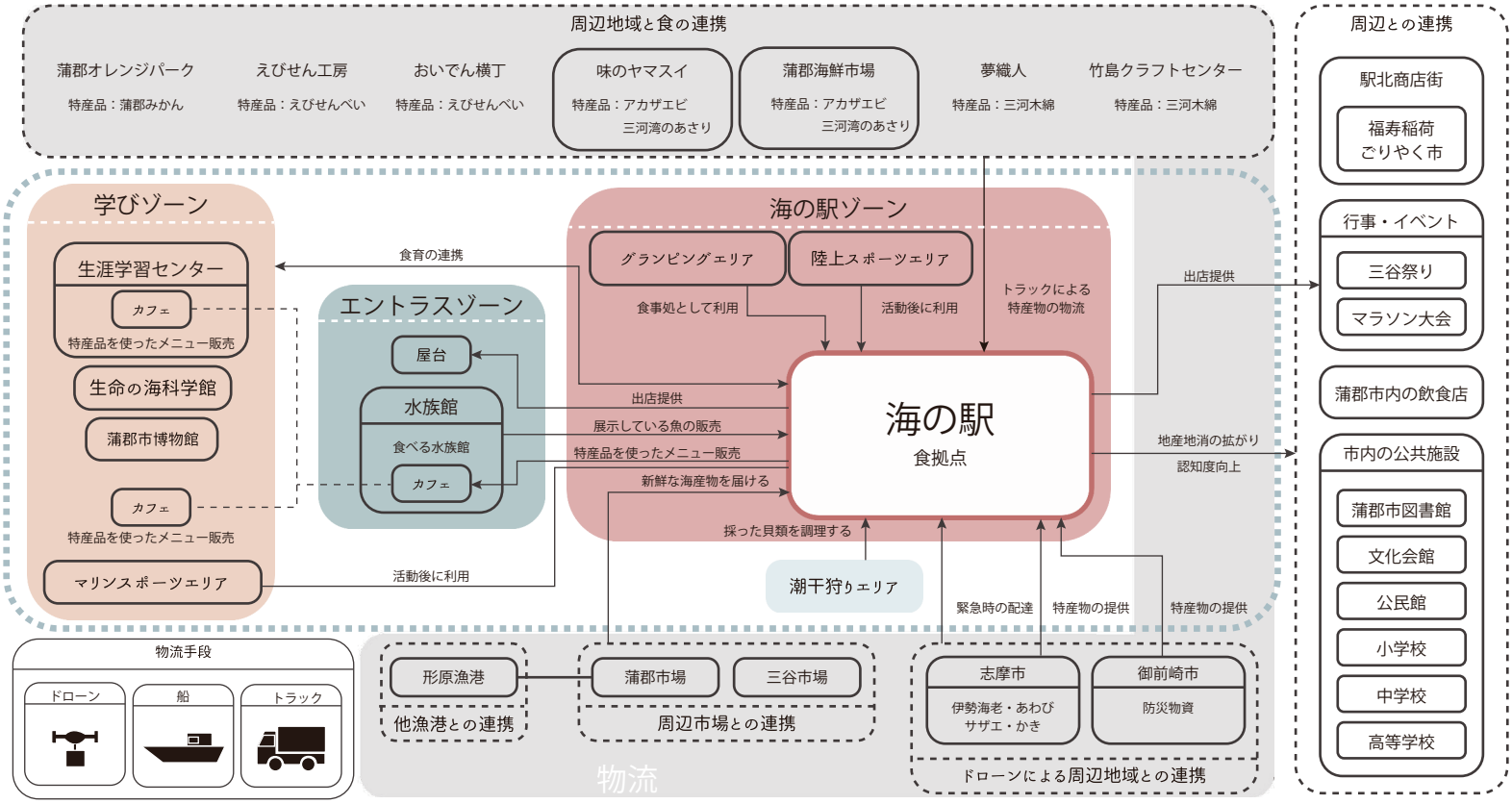
ドローン、トラック、船　陸海空の物流の拠点として、特産品の集積場となる。特産物を集積することで、魅力発信に繋がるとともに、各地の観光施設の発展にも繋がる。また、地域外の特産物が集まることにより市民の「食」への興味をうみ食育に繋がる。蒲郡の特産物がここを拠点に分散していくことにより地方での蒲郡の魅力発信に繋がる。

■市民がつくる観光場所

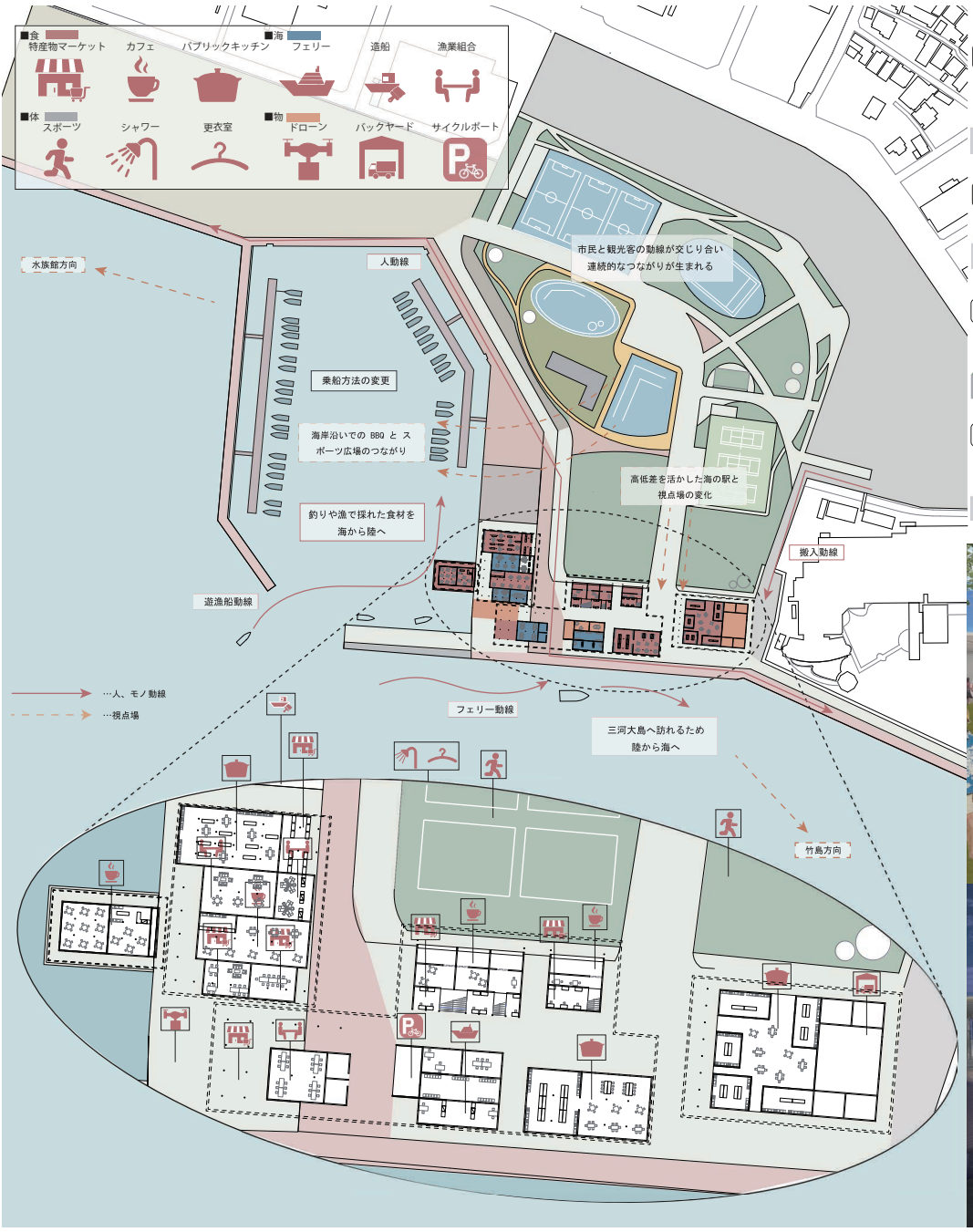


海の駅が市民の市民の食育をサポートすることで、市民全体の健康に繋がる。それらが日常化されて、蒲郡市全体の発展に繋がる。

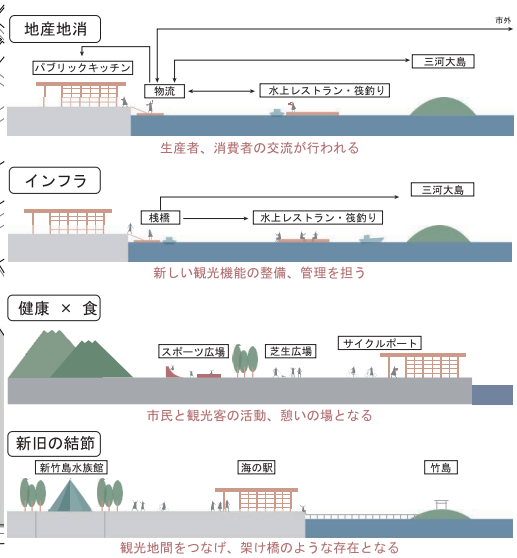
蒲郡市民、食育、物流機能によって地域とともにつくる個性豊かな観光の場が生まれる。



05 機能整理



■シークエンス計画



スポーツ（陸上・マリンスポーツ）

■蒲郡に必要なスポーツ：生涯スポーツ

課題としてが若年層がいない･流出、高齢者の増加、まとまった活動の場がないことが挙げられる。
蒲郡市には、市民の身近な範囲にこどもから高齢者まで多世代に渡って活動できる生涯スポーツの場が必要である。ライフステージに合わせた地域のスポーツコミュニティのなかで、心と体の健康を増進させていくことが重要である。

･ライフステージごとのメリット

若年層	ファミリー層	シニア層
○屋外の活動･遊ぶ場所 ○部活に捉われないスポーツ ○ニーズある新しいスポーツ ○整備された競技環境	○家族の憩い･活動の場 ○子供の成長に合わせた環境 ○休日のクラブ活動 ○充実した子育て環境	○心と体の健康増進 ○家庭以外のコミュニティの場 ○スポーツの学びなおし ○医療費削減

身近な生涯スポーツの場が、持続的な心と体の健康、定住にもつながる。

■スポーツ拠点となるクラブハウス

蒲郡駅 ▶ スポーツエリア ▶ クラブハウス ▶ スポーツ観戦

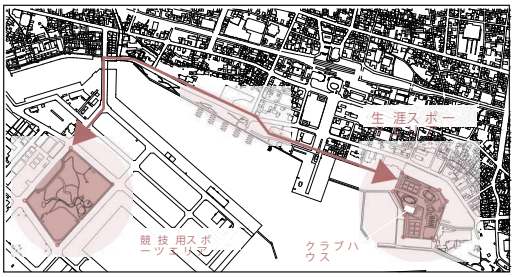
スポーツのためだけにその場所を訪れるのではなく、周辺の施設などと連帯的に1日が過ごされることでスポーツコミュニティの場が生まれ、場所の価値が高まり、収益化にもつながる。

■マリンと陸上スポーツを整備

蒲郡で盛んなマリンスポーツと市民の場となる陸上スポーツの場を整備する。
市民活動の身近なところにスポーツの場があることで、誰しもが気軽にふらっとできる生涯スポーツの場となる。

陸上スポーツ

敷地西側に生涯スポーツ、東側の埋め立て地に競技用スポーツとエリア分けをする。
生涯スポーツエリアは各スポーツを蒲郡駅から竹島へと至る動線上に計画し、海の駅とも一体的に活動が行われる。



･選定陸上スポーツ

フットサル（3 面 ）

テニスコート（3 面 ）

スケートボード

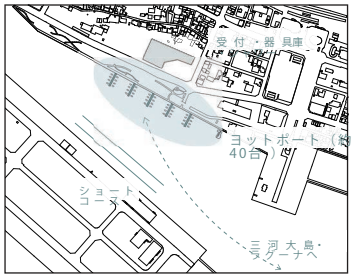
テニスコート（4 面 ）

屋外ヨガ

ランニング

マリンスポーツ

敷地東側の海は波が落ち着いていること生かし、ヨットポートを設け、小中規模ボードの三河大島･ラグーナ沖の回遊コースを新しく設ける。



･選定水上スポーツ

ディンギー

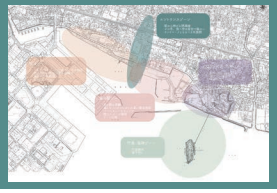
シーカヤック

ＳＵＰ

中型ヨット

新竹島水族館

駅から海辺に向かうエントランスゾーンに、蒲郡のランドマークとなる新しい竹島水族館を提案する



01 計画概要～ランドマークとしての新竹島水族館～

■対象敷地について

対象敷地は、観光地竹島に近接した特性を生かした魅力的な港湾空間の形成を図ることを目的として、平成13 月に埋め立てが竣工したが、社会情勢等の影響を受けて暫定的な利用にとどまり、土地利用は進んでいない。

また蒲郡駅から一直線方向に海があるが、道を歩いていて海を見ることができず、先になにがあるのかわからない為、アイキャッチ としての モニュメント性から、駅からの人の動きを計画する必要が ある。

■市民の憩いの場となる水族館

既存の展示内容や室について		広場		カフェ
展示生物は、海水や淡水（川や湖など）などを展示。展示内容は常に変化し、訪れる度に違う展示の工夫が魅力の一つ。	＋	広場を一体的に整備していく		水族館内部のカフェへ広場から直接アクセスできる

人々が集い日常的に利用される新竹島水族館

対象敷地にアイキャッチとなるモニュメント性を持たせた新竹島水族館を計画する。また、現在の竹島水族館のアップデートを図りながら、人々が集い、市民に日常的に利用されるために、水族館と一体的に広場を整備し、内部のカフェへ広場から直接アクセスできるようにすることで、水族館でありながら市民の憩いの場として地域に根付いていく。

■周辺との関わり

海洋研究

参考事例：大阪海遊館 海洋生物研究所以布利センター

センターに隣接している以布利漁港から漁船が出港し漁が行われる。以布利センター専任の飼育員が、設備や環境面で海遊館では出来ないセンターならではの研究活動を行っている。

食育

食べる水族館

市内の飲食店を中心に行われている。

新竹島水族館

海洋生物の研究
参考事例:福井県立大学

三谷水産高校

ウナギの養殖研究

水産試験場

施設公開デーの体験教室

生命の海科学館

海の歴史の展示

施設が取り組んでいることを海洋研究で生かしてく

海の駅
食の拠点

食育の一環として、水族館と連携し、水族館で展示している魚の販売やその魚を使った料理を提供する。

02 効果と将来像

■モニュメントの事例分析

事例：ジェノバ水族館

事例：ジェノバ水族館

モニュメント＋施設

モニュメントと施設がそれぞれで計画されることで、敷地全体に回遊が生まれる。

事例：オペラハウス

事例：ビルバオ

モニュメント＝施設

施設が地域のシンボルとなることで、住民にとって誇りとなり観光スポットとしても活性化する。

事例：デルフト工科大学

事例：NYC AQUARIM

ランドスケープ × モニュメント

モニュメントと施設がランドスケープと一体的に計画されることで、奥の導きたい空間へ誘導する。

**モニュメントをランドスケープと絡めて計画するすることで
駅からの主動線を計画地である海辺一帯へ誘導する**

■暮らしと観光の融合

体験を通して学ぶ

海洋生物についての研究や実際に水槽越しに目にした魚を食べるという体験を通して学ぶ。

三河湾の地形を建築のモチーフとして用いて遊びながら同時に地域について学ぶことができる。

市民の憩う場の広がり

水族館を地下に計画し、地上を広場化し日常的に利用されることを目指す。

水族館の広場と周辺の広場が一体的に造成され、海辺一帯に動線を誘導する。

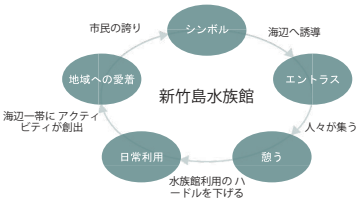
海への親しみを育む

市民が憩える親水空間を広場内に設けることで海への親しみを育む。

参考事例：江の島湘南港『タイドプール』

潮の満ち引きに合わせて、人口プールの水位が変わる。

■相乗効果

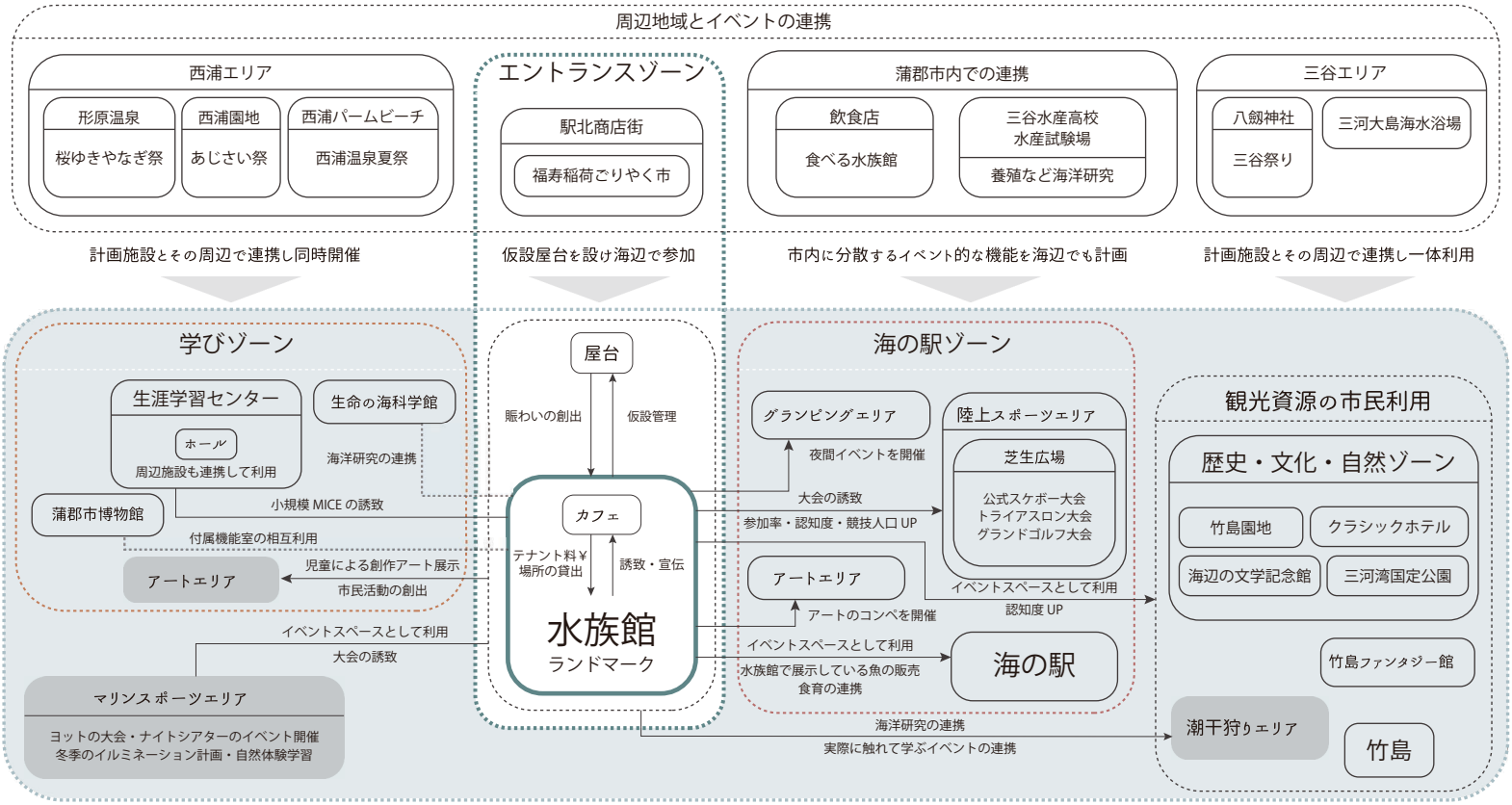


蒲郡の玄関としてモニュメント性をもち、人の動きを海辺一帯に誘導する。

周辺の施設とも連携を図ることで、海辺一帯が連続的に利用され滞在時間を拡張する。

新竹島水族館と計画地全体が同時利用され相乗効果をもたらす 。

■相関図



03 蒲郡駅前の新しいシンボル

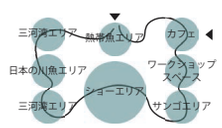
A案

駅から一直線上でアイキャッチとしてシンボル性をもつ竹島水族館

モニュメントと広場が一体的に整備され、市民の憩いの場が創出する

■機能

□シームレスな平面ゾーニング



内部を室で区切らずシームレスに分けることで、空間に可変性を持たせる。

□可動式の水槽

展示内容の変更に合わせて水槽を動かすことで、毎回違う楽しさを創出する。

□ラボ展示

参考事例：すみだ水族館『アクアラボ』

一般的に裏側で見ることのできない海洋生物を研究する様子を展示する。

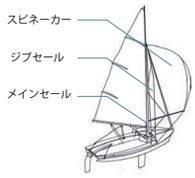
□ワークショップスペース

参考事例：すみだ水族館

体験を通した学びを育む場として、ワークショップスペースを設ける。

■建築的デザイン

□モニュメント

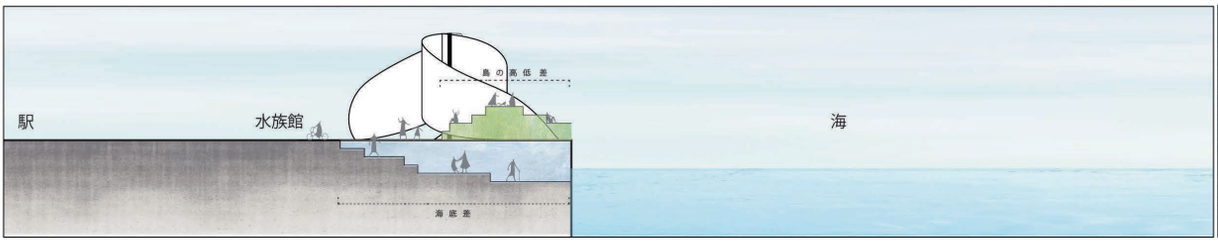


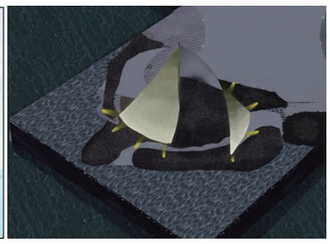
海のイメージをもつヨットを構成する3つの帆を水族館に向かう地下への導入。屋根からわずかに光がもれることで階段を下るとき、まるで海の中へむかっていくように演出する。

□エントラス

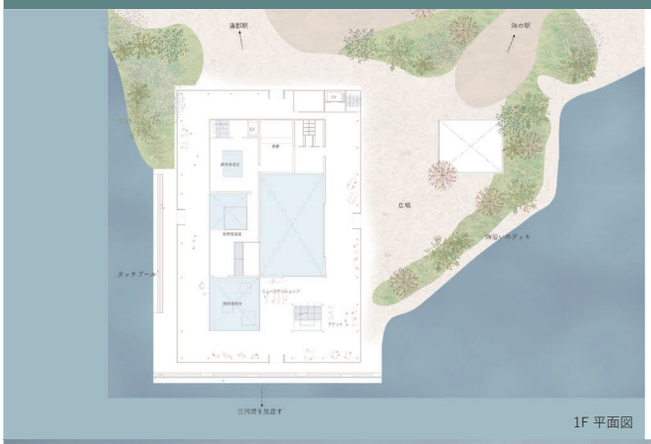
参考事例：ルーブルアブダビ

外観デザインとして使う。

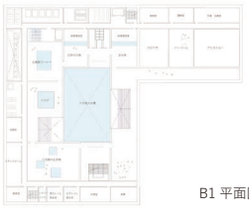




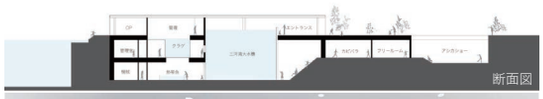
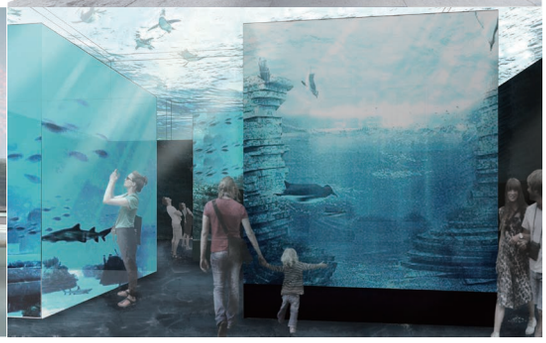
B案



1F 平面図


B1 平面図

B2 平面図



断面図